

ドミートリー・クズミンの翼——肯定の詩学

Крылья Дмитрия Кузьмина: поэтика принятия жизни

鴻野わか菜
KONO Wakana

В данной статье рассматриваются мировоззрение и основные мотивы поэзии Дмитрия Кузьмина, отраженные в его первом сборнике «Хорошо быть живым. Стихотворения и переводы» (2008). В первом разделе данной работы определяются задачи исследования и приводится краткая биография поэта. Во втором разделе анализируются особенности «объективизма» у Кузьмина. В сравнении со стихотворениями американского поэта «объективистской» школы Чарльза Резникоффа, оказавшего влияние на Кузьмина, поэзию последнего отличает сильный интерес к индивидуальной человеческой жизни. По словам самого поэта, останавливать неповторимые и выразительные мгновенья абсолютно индивидуальной жизни – главная тема его творчества. В поэзии Кузьмина метро является важным мотивом, символизирующим этот мир, в котором человек встречается с другими «на мгновенье» и сознает невозможность отождествления с ними. Мотив окна (мотив мельком увиденной комнаты через окно) также служит символом жизни, эфемерной встречи с другими, символом остановленных мгновений. В третьем разделе данной статьи, где рассмотрены стихотворения Кузьмина о близких людях, анализируется, в частности, мотив матери. В четвертом разделе исследуются стихотворения, посвященные поэтам, мотив интернета и т.д.

1. クズミンの文学活動

1968年モスクワ生まれのドミートリー・クズミンは、ペレストロイカ末期に文学活動を始め、文学者、翻訳家、批評家、出版者、詩人として多面的な活動を繰り返してきた。なかでも文学活動家としての活躍はめざましく、出版社「アルゴリスク」を創立して現代詩人の作品集や文芸誌を数多く出版し、ソ連崩壊前後の混乱した社会状況下で現代ロシア詩の復興に努めてきた。1988年には、詩人スタニスラフ・リヴォフスキー（1972年生）、ワジム・カーニン（1973年生）らと共に、25歳以下の詩人、作家達が集う「若き文学者の同盟」である「バビロン」を創設。朗読会や文学コンクールを企画しながら、文学の最前線を紹介する文集『バビロン』¹⁾を刊行し、90年代半ばからは、海外在住のロシア語詩人や老年の作家も引き入れて、世代や国境を越えた文学運動を展開してきた。1997年には、サイト「バビロン」をオープンし、モスクワを中心とする無数の朗読会の詳細なレビュー、現代作家の人物事典、現代文学アンソロジーなどを作成し、ロシア現代文学の見取り図を作りあげた。2002年には、「文学的なバビロンの建設における献身的活動と非公認文学の伝統の創造的な拡大」についての功績を認められ、アンドレイ・ベールイ賞（「ロシア文学に対する特別な貢献部門」）を受賞。2004年に新しい活動形式を求めて「バビロン」

¹⁾ 雑誌『バビロン』は、1989年から2004年まで刊行された（1992年までは地下出版）。

を解散した後も、『空気——詩の雑誌』（2006年-）の編集長として、現代詩の記録と普及を進めている。

このようにクズミンは文学活動家として名を馳せてきたが、それに対して彼の詩人としての側面は、今まであまりにも過小評価されてきたように思える。その一因は、クズミンが比較的寡作であることに加えて、文壇における自己の役割を彼自身が禁欲的に規制してきたことにある。彼は、「現代ロシア文学には、私のレベルの詩人は数100人はいる」が「一定の構想に基づいた理にかなったプロジェクトを文学の分野で実現できる人間は、片手の指で数えられる」²⁾ という信念のもとにオーガナイザーや編集者の立場に徹し、「13年間で約250冊の本」³⁾ を出版したにもかかわらず、自分の詩集は1冊も出そうとしなかった。クズミンの処女詩集は、2008年に、新文芸時評社が刊行している現代ロシア詩の代表的な叢書「新しい詩」の一冊として、ようやく日の目を見ることになった。

『生きているのは素晴らしい』と題されたこの処女詩集には、1993年から詩集刊行時までに書かれたクズミン自身の詩に加えて、彼が長年手がけてきた英詩やウクライナ詩の翻訳が収められ、自己の活動や文学について語ったインタビューが添えられている⁴⁾。本論文では、この処女詩集のテキストを中心に、詩人自身から入手した一次資料等も参考にしながら、約15年にわたるクズミンの創作をふりかえり、主要なテーマやそこに表れる世界観を展望し、彼の創作と翻訳、文学的活動の関係を考察したい⁵⁾。

2. 客観主義——孤絶から共鳴へ

クズミンは、詩作を始めた当初はナドソン（1862-1887）らの退廃主義の詩人に心酔し、その後80年代末から90年代初頭にかけて、ヨシフ・ブロツキー（1940-1996）を模倣した時期があったが、93年前後にアメリカの客観主義の詩にインスピレーションを得たことで、ようやく「自分自身の語調の微妙なニュアンスと視角を持つ詩」が書けるようになったと語る⁶⁾。具体的には、詩人チャールズ・レズニコフ（1894-1976）の名を挙げて、「そっけない故意に感情を排した記録が、同時に心の動きの速記録にもなっている」彼の手法こそ、自分が探し求めていたものだったと述べている⁷⁾。

処女詩集の第1章「13階からの眺め」の冒頭と最後に配置された、同じ行で始まる2つの詩について、クズミンは「これは、厳格な客観主義（周囲の現実を瞬間的に撮影するだけで、叙情的な思いは推察されるにとどまる）から、『厳格ではない』客観主義（個人の感情が現実の一部として同等に扱われ、可能であるならそれを瞬間的に撮影してもよい）への軌跡」⁸⁾ を表していると解説している。たしかに、この対照的な一対の詩は、クズミ

²⁾ イーゴリ・コチューフによるインタビュー参照。Кузьмин Д. Хорошо быть живым. Стихотворения и переводы. М.: Новое литературное обозрение, 2008 (Серия «Новая поэзия»). С.9.

³⁾ Там же. С.9.

⁴⁾ クズミンは、いくつかの例外を除いて作品に執筆の年代を併記していない。詩集に収められた詩の年代については、クズミンから直接教示を受けた。

⁵⁾ なお、クズミンは2009年に、この詩集によって、詩を対象とする文芸賞として2003年に創設されたモスクワ・スコア賞（モスコフスキー・ショート賞）の小賞を受賞している。

⁶⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.11.

⁷⁾ Там же. С.10.

ンが客観主義を独自に展開させていく過程をはっきりと写し出しており、その意味では、自己の創作の本質を開示する詩人のマニフェストとなっていると言って良いだろう。

具体的にテキストを見てみると、「厳格な客観主義」の例である冒頭の詩では、主人公が高層階から俯瞰した下界の様子が描かれているが、主人公と下界の間に明らかな繋がりはなく、主人公の孤絶を表すかのように世界は灰色で塗り込められている。

13 階からの眺め——

炎暑の昼の後、黄昏時
夕立が降り始める
灰色の空から
稲妻が走り
灰色の家々の窓を次々に光らせる
人々が森から飛び出して
分かれ道を散り散りに駆けていくが
じきにずぶ濡れになって
悠々と歩き出す。
そしてようやく大雨の穏やかなざわめき。

「13 階からの眺め——炎暑の昼の後……」⁹⁾

一方、章の最後に置かれた詩では、主人公は風景に自らの愛の物語を重ね合わせており、主人公の内面と外界にいくつもの照応が生じている。主人公は、黄色い木立を見ては恋人の同色の衣服を思い出し、トラックのクラクションは「ハスキーなテナー」だと感じている。同性愛者であるクズミンの作品では、他の詩と比較すると分かることだが、「ハスキー」という言葉は親愛なる者の存在を暗示していると考えられる¹⁰⁾。そしてこの詩では、前者の「灰色」の詩とは対照的に、あたかも主人公と世界の共鳴を祝福するかのよう、鮮やかな色彩（緑、黄、赤、黒、白）が乱舞している。

13 階からの眺め——

草は緑
木立は明るく
カナリヤのように黄色い
おまえのウィンドブレーカーのようだ。
梢の先端だけが
ほんのり赤く染まっている。
黒犬が

⁸⁾ Там же. С.305.

⁹⁾ Там же. С.47.

¹⁰⁾ クズミンは、ペテルブルクの運河脇にある小鳥の銅像にこと寄せた詩「嫌々ながらの散歩 ペテルブルク」で、（おそらく愛の罫に囚われたために）「時々訪れていただけの場所に永遠にとどまる」ことになった「いとしい」「小さい誇り高いおまえ」は、「ハスキーな声」をしていると書いている。Там же. С.50.

白樺林をうろついている。
向かいの工事は
終わりに近づいている。
工事に使われなかった
金属製の何かが
鉄のコンテナに投げ込まれる。
トラックが
ハスキーなテナーでクラクションを鳴らした。
どこか近くで
携帯電話がひっきりなしに鳴っている。
バグパイプのメロディで。
恐くなって
バルコニーのドアの後ろに下がる。
人生が
あまりに素晴らしいので
飛ぶことさえできそうな気がする。

「13階からの眺め——草は緑……」¹¹⁾

前者の詩では孤高の空間に閉じこもっていた主人公は、後者の詩では高みから飛び出せると感じている。それは、失墜を予感させるイカロスの飛翔ではなく、世界への共感という翼を持つ者の幸福な飛行である。後述のように、クズミンの詩が源泉とするのは、世界や他者への飽くなき関心と共感であるからだ。

クズミンは、自分の創作の動機は、「人間の完全に個人的な」「二度と繰り返されることのない豊かな瞬間を静止させる」¹²⁾ ことにあると語り、しばしば自分の生ではなく他者の生の瞬間を詩に昇華しようと試みてきた。彼の作品に登場する他者は、多くの場合は行きずりの人であり、クズミンは彼らの描写を通じて、世界の片隅で見かけた人間の生（とそれを見ている自分の生）の瞬間を永遠化しようとする。こうした生の断片化と記録こそが、彼の近年の作品の主要なテーマであると言って良い。

この点において、クズミンとレズニコフの客観主義は、本質的な差異を含んでいる。主に都市の光景を描写の対象としたレズニコフと、他者の生を描写の中心とするクズミンの作風の違いは、地下鉄をめぐる詩からも明らかである。クズミンは、地下鉄でつかの間の時間を共有した乗客達は、「私の人生のある瞬間が静止して実体化したもの」¹³⁾だと述べて、処女詩集の第3章全体（「道連れ」）で、地下鉄で出会った人々というテーマを展開している。それに対して、クズミンの翻訳によるレズニコフ詩集に収められた地下鉄をめぐる3編の詩に人影はない。レズニコフは、ある詩では地下鉄駅を先史時代の洞窟になぞらえて電気や壁画という内装だけを描写し¹⁴⁾、別の詩でも人ではなく地下鉄の「レール」に呼び

¹¹⁾ Там же. С.63.

¹²⁾ Там же. С.20.

¹³⁾ Там же. С.20.

¹⁴⁾ Там же. С.78.

かけるのである。

地下鉄のレールよ
おまえがまだ厚い地層の礫石だった頃
幸福についてなにを知っていたのか？
今ではおまえの上で電灯が光っている

レズニコフ「地下鉄のレールよ……」¹⁵⁾

一方、クズミンが地下鉄の詩で描写の対象とするのは、焦燥、疲労、興奮や生活感を滲ませた人間達である¹⁶⁾。たとえば「5月9日」と題された、戦勝記念日の地下鉄の車輛を描いた詩では、顔に「アスファルトの上を引きずられたような」深い傷跡のあるパンクの青年が虚ろな目で佇む脇で、男がなぜか——どこかで拾ったのか夜勤明けなのか——昨日の新聞に読みふけり、別の一角では派手なジーンズに身を包んだ女の子達が酔っぱらって、祝日の旗でお互いを陽気に叩き合っている。こうして彼らの様子が数10行に渡って描写された後、「私は 家へ 帰るところだ」という最後の3行によって、「私」という観察者の存在が突然言及される¹⁷⁾。それはまるで、個々の乗客に焦点を当てていたカメラがズームバックして車輛全体の遠景と共に映画が終わるのにも似た効果を生み出している。

この詩のように、クズミンの作品では、しばしば、「彼ら」の描写に混じって「私」が不意に姿を現す。しかし、一人称主語がまったく登場しない作品においても、クズミンの詩には、他者達を見ている者としての「私」の気配が漂っている¹⁸⁾。それは、対象の内面と生活を想像しながら、時として他者との同一化に憧れる「私」である。

たとえばクズミンは、現代詩人ファイーナ・グリンベルク（1951年生）が地下鉄で見かけた青年をモンゴル・ブリヤート神話のテングリ神に喩えた詩を書いていたことを知って、次のように書いている。

……私は1986年に書かれた彼女の詩「テングリの顕現」を見つけた。その詩は私の一連の詩と同じテーマに捧げられていた。地下鉄の車輛である青年を見たことによる強烈な体験。その体験はエロティックで、なによりも相手との同一化の渴望と同一化の不可能性の意識に突き動かされている（高度にエロティックな体験は、まさにそこに帰するのだから）¹⁹⁾。

クズミンの次の詩も、おそらくこうした文脈で読まれる必要があるだろう。

¹⁵⁾ Там же. С.77.

¹⁶⁾ 詩人ダリヤ・スホヴェイも、『生きているのは素晴らしい』の書評の中で、クズミンの関心の的は人間であると指摘している。Хроника поэтического книгоиздания в аннотациях и цитатах // Воздух. 2008, №3. <http://www.litkarta.ru/projects/vozdukh/issues/2008-3/reviews/>

¹⁷⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.89.

¹⁸⁾ 詩の前半で地下鉄の乗客を描写し、最後の3行で「私」が登場する他の詩の例として、詩「若く美しい者達……」がある。Там же. С.92.

¹⁹⁾ Там же. С.308.

出っ歯で
耳まで届きそうなくらい目の縁を化粧したお婆さんが
連れの女性に話している 「私は座らないわ
毛皮のコートを着てると暑くなるし
他にもいっぱい着込んでるから」

12歳くらいの少年が
「もたれないでください」という張り紙にもたれて
スティック・キャンディーを片方の頬からもう一つの頬へ移している
白いプラスチックのスティックが口の中で動き回っている
兄貴から借りた粋な革のジャンパーがだぶついている
「なめし革のコートを着た若い母親が……」抜粋²⁰⁾

この詩では、引用していない部分も含めれば全部で4人の乗客が観察されているが、最後の少年の場合だけ、外面の描写だけでなく、本人に訊かなければ正確には分からないはずのこと（家族構成や衣服の貸し借り）が織り交ぜられている。この描写が源泉とするのは、無邪気な空想や穏やかな洞察というよりも、おそらく同一化の欲望であり、この詩は最後の連でゆるやかに性愛に通じていくように思える（少年の頬の肉感的な描写もそれを裏付けている）。

ところで、クズミンはなぜ、他者との同一化や愛を描くための場所として、地下鉄を選ぶのだろうか。地下鉄という空間は、彼にとってどのような空間なのか。おそらく、少なくとも3つの理由を推測することができるだろう。

第一に、先述のクズミンの言葉——地下鉄でつかの間の時間を共有した乗客達は「私の人生のある瞬間が静止して実体化したものである」——からは、人生や世界の象徴としての地下鉄というイメージが浮かび上がってくる。地下鉄で他者と共有する時間の偶然性と儚さは、そのまま、人間の生自体の特性でもあるからだ。

第二に、地下鉄が、不特定多数が互いを注視する密室であり、対象への親密な接近を阻む公共的な空間であることを考えるなら、この意味においても地下鉄は、生の象徴となり得る。「相手との同一化の渴望と同一化の不可能性の意識」に引き裂かれている詩人にとって、甘美なコミュニケーションや直接的な言動を妨げる地下鉄という場は、不自由な生のあり方を集約的に示しているからである²¹⁾。知人との距離すら狭められないもどかしい状況は、次の詩の主題にもなっている。

M・Pへ

²⁰⁾ Там же. С.90-91.

²¹⁾ 地下鉄は、ロシアの生活史においては恋愛対象を探す場所として機能してきたが、クズミンの詩では、地下鉄での出会いが発展することはなく、他者との関係の瞬間性が強調される。なお、クズミンの詩で、他者との（ある程度）連続的な関係を求めるための場として登場するのは、クラブと並木道である。

僕達は地下鉄で長距離列車の駅に着いた
君はずっと、どんなに地下鉄が好きかという話ばかりしていた
君の唾の飛沫が
僕の額に落ちた
冷たい点となって
（飛んでくるあいだにどうやって冷めたのか？）
ぼくが君から手に入れたのは、それがすべてだ

「僕達は地下鉄で長距離列車の駅に着いた……」²²⁾

とはいえ、親密な接近を阻む公共空間という特性は、もちろん地下鉄に限ったものではない。おそらくクズミンが地下鉄に固執する第三の理由があると思われるが、それは地下空間と死の結びつきなのではないだろうか。文化史研究者のマリヤ・マヨフィスは、ある論文でクズミンの詩「思想的・政治的な自己規定についての宣言のかわりに」を取り上げて、詩に登場する3つの空間——モスクワ中心部の地下街、環状線のトンネル、地下のカフェ——がすべて地下にあることを指摘している。その上で、そのうちの2つの空間でテロや政変による市民の死が描かれていることに注目し、次に挙げる詩「嫌々ながらの散歩 モスクワ」とも比較した上で、クズミンの作品における「地下道は死と個人の抑圧の象徴である」と結論づけている²³⁾。

虚ろな地下の洞窟を出て
背の低い警官の凝視をくぐる
だれかが私の跡をつけている気がする
（こういう時にするべきなのは、そう、後ろを振り返らないこと、
恐れないこと、頼まないこと）

「嫌々ながらの散歩 モスクワ」抜粋²⁴⁾

クズミン自身の解説によれば、この詩は、「自分の心を乱してやまないオルフェウスの神話が初めて形をとって現れた」²⁵⁾作品だという。一方、クズミンの地下鉄をめぐる詩には、死や冥界を思わせる直接的な表現は見られない。しかし、クズミンの作品における他の地下空間の死との繋がりや、オルフェウスの物語が深く詩人の心を捉えていることを思えば、地下鉄もまた（意識的にせよ無意識的にせよ）死の空間であることは否定できないだろう。つまり、地下鉄の車内で乗客との同一化を欲するクズミンの詩の主人公は、冥界を訪れるが妻を取り戻すことのできないオルフェウスの写し絵になっているのである²⁶⁾。

²²⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.98.

²³⁾ Майофис М. «Не ослабевайте упражняться в мягкосердии»: Заметки о политической субъективности в современной русской поэзии // НЛО. 2003, №62. <http://magazines.russ.ru/nlo/2003/62/maiof-pr.html>

²⁴⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.51. なお、この詩はクズミンの作品の中でも、日常空間の神話化、外界の内面化として興味深い例であり、クズミンの客観主義の一つの特質を示唆している。

²⁵⁾ Там же. С.306.

²⁶⁾ クズミンは、地下鉄のモチーフに特別な象徴性を与えた他の現代ロシア詩人の例として、ミハイル・グロナス（1970年生）の名を挙げている。Там же. С.20.

このように、地下鉄はクズミンにとって、限られた時間を他者と共有し、それと同時に他者との一体化の不可能性を実感する場である。だがここで、(詩人自身の解説でも先行研究も触れられていないが)クズミンの作品にはこれらの点で地下鉄に匹敵する場がもう一つあることに触れておきたい。それは「窓」である。クズミンの詩には、外から覗かれた室内というモチーフが何度か登場するが、2つの世界を結ぶ小空間である窓というモチーフは言うまでもなく、詩人にとって重要な二つの主題——他者との邂逅、止められた(切り取られた)生の瞬間——の表象となりえている。

1. ウジェーリナヤ²⁷⁾

エノタエフスカヤ通りの広いこと！
市街電車の環状線の脇で
最後まで取り残された老婆が
ビニール袋に詰めた砕いたアンズタケをどうしても売りさばくことができない。
丸味を帯びた鑄鉄の格子のついた
半円形のバルコニーの下
1階に灯りがともる
台所だ。
そこに見えるのは白塗りの壁
水切りバスケット(何列かの
蓋と深皿)
そして緑色の袖無しのワンピースを着た女が
剥き出しの両腕を振り回している。
奥の方にいる見えない誰かに
何か納得させようとして

「嫌々ながらの散歩 ペテルブルク」第1節²⁸⁾

この詩では、散策者が通りすがりに目にした室内の光景が、平凡な出来事であるにもかかわらず鮮烈な印象を残す映像として描写されている。こうしたクズミンの作風が想起させるのは、彼が愛読し影響を受けた作家コルタサルが、出来の良い短編小説を写真に喩えた言葉である。コルタサルの場合と同様に、クズミンの詩においても、窓や室内のイメージは、描写された光景とは別の次元——世界の偶然性や生の普遍性——に読者の意識を向かわせていく。

写真家、あるいは短編作家は、意味深いイメージなり出来事を選び出すと、それだけを写すか、語ることになる。その場合、イメージ、あるいは出来事はそれ自体価値のあるものであり、しかも写真なり短編のなかで映像、もしくは言葉によって語られている挿話をはるかに越えたところに存在するあるものへと、見る人、読む人の知性と

²⁷⁾ サンクト・ペテルブルク、ヴィボルク地区の地名。

²⁸⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.49.

感受性を向かわせる一種の導入口、刺激剤としての役割を果たし得るようなものでなければならぬ²⁹⁾。

ところで、窓の中を覗き込むという行為は、（クズミンの創作の根底にある）他者への飽くなき関心をいわば視覚化したものとして、詩人の立場を象徴的に表すものだ。そして次の詩にも表れているように、その関心は欲望と表裏一体である。

コストロマではショートパンツの少年達は歩いていない
少女達もあまり歩いていない
だから、そこでは脹ら脛の
小さなタトゥーを見ることはないし
空気は澱んでいる（中略）
でも一番離れた家で
灯りの消えていない窓を覗き込みさえすれば
一人きりで
剥き出しにしている——肩、脹ら脛、太腿、
下方へ伸びるほどに濃くなる
薄い毛の小径を。
ああ、最後の家で
そこでは少年達は歩いていない
灯りが消える、皆眠っている
昨日はまだ愉快だったコストロマで。

「コストロマではショートパンツの少年達は歩いていない……」抜粋³⁰⁾

コストラマはロシア北西部の都市であり、この詩はクズミンが同市を訪れた際の印象に基づいて書かれたものだが、「コストラマ」には、（詩人自身も詩集の注で述べているように）スラヴの異教における豊穡の女神という意味がある。死と再生を繰り返す春の化身であるこの女神のイメージは、詩の後半で展開されるエロティックな描写に奥行きを与えている。そのことによって、性的な香りが立ちこめるこの詩は、隠微な窃視症にとどまることなく、原始的な欲望を率直に描き出した生の讃歌となり得ている。

この作品に見られるように、クズミンの詩の妙味の一つは、密やかさと開放性、繊細な「叙情性」³¹⁾と奔放な力強さがせめぎ合い、反転し続けることにある。クズミンはある詩で「詩は——神よ許し給え、美しくてはいけない、病的でなくてはならない。少年の未成熟な胸のように」³²⁾と書いているが、時として、彼の詩の湿り気を帯びた秘めやかさは、次の瞬間には太陽の香りをまとっている。

また、クズミンの近年の創作は、先述のように外界と内面の描写を対応させる客観主義を拠り所としているが、世界に対する高い共鳴性（それは、クズミンにとって客観主義が

²⁹⁾ 木村榮一「解説」コルタサル『コルタサル短篇集——悪魔の涎・追い求める男 他八篇』岩波文庫、1992年、292頁。

³⁰⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.136.

文学上の手法であるにとどまらず、まさに主義であることを物語っている)も、クズミンの詩の魅力の一つである。クズミンの作品は、様々な他者への関心、共感、そして時には愛によって輝いている。

3. 愛と血——永遠の息子

クズミンは、いわば開かれた愛についての詩として、偶然出会った他者達との関係を数多く詩に書いてきたが、それと同時に、恋人達との極私的な愛の詩も綴ってきた。

後者の詩は、前者の詩とは対照的に、一見、閉じられた愛、「家族的な愛」を描いているかのように見える。たとえば次の詩では、寄る辺ない自分と恋人の姿を、共にほの明るく光る2つの電球に喩え、2人の関係を「家族」になぞらえている。また二番目の詩には、恋人と過ごす日々を大切に生きたいという痛切な思いが溢れている。

家族

……私の体は痛んでいる
初夜の後ではそうならざるを得ない A. アナシェーヴィチ³³⁾

朝からあらゆる筋肉が痛む
特に肩、肘、脹ら脛が。
昨日は一人で
一日中
空色の壁紙を貼っていた
脚立を
上り下りして。
お金が入ったら
この壁際に

³¹⁾ ファイナー・グリーンベルクは、クズミンの詩の叙情性について以下のように述べている。

私見では、クズミンの詩は、叙情的なスケッチであり、ペンで書かれた軽やかな絵画であり、きわめて叙情的な暖かさが染み渡っていて、実は、ロシア詩のよく知られた叙情的な詩篇の伝統(「パナーエワ詩篇」、「デニーシエワ詩篇」、ポドリンスキー、ブローク、ミハイル・クズミンらの詩篇)を発展させたもの——もちろん新しい次元で新しい方法で発展させたもの——である。自分の詩の中でこうした「叙情的な小品の気分」をこれほどの繊細さ、自由、ときめきと共に表現できる現代の詩人を、私は他に知らない。

Гримберг Ф. «Вавилон» человека // Знамя. 2002, №2.

<http://magazines.russ.ru/znamia/2002/2/grim-pr.html>

鴻野注:「パナーエワ詩篇」は、19世紀の詩人ニコライ・ネクラーフ(1821-1878)が愛人アヴドーチヤ・パナーエワに捧げた一連の詩。「デニーシエワ詩篇」は、同じく19世紀の詩人フョードル・チュッチェフ(1803-1873)がエレナ・デニーシエワとの愛を描いた一連の詩を指す。アンドレイ・ポドリンスキー(1806-1886)、アレクサンドル・ブローク(1880-1921)、ミハイル・クズミン(1872-1936)はロシアの詩人。

³²⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.266.

³³⁾ アレクサンドル・アナシェーヴィチ。1971年生まれの詩人、劇作家。

新しいベッドを置こう。
今はまだドイツ製の
プラスチックのベッドだけれど
黄色い月が
配電網に灯る
40ワットの2つの電球

「家族」³⁴⁾

あの作家が時々インターネットで発表する
短編小説を読んで
2度か3度
僕は今やっているすべてのことを投げ出して
そのかわりに毎晩夕食を作って 愛する人が仕事から帰ってくるのを
出迎えたくな
た
だって彼はいつか死んでしまうのだから。

「思想的・政治的な自己規定についての宣言のかわりに」抜粋³⁵⁾

これらの詩の主人公は、恋人との関係に「家庭」を求め、かけがえのない相手への愛情を吐露している。しかしながら、クズミンの恋愛詩は総体として、唯一無二の愛ではなく、世界に求めることのできる性愛の無限の可能性を描いている。クズミンは、通りすがりの他者達をめぐる詩において世界や人間に対する愛の多様さを描き出してきたが、極私的な体験を描いた詩においてもその姿勢には基本的に変わりがない。

R. Mへ
君の肌の色をした
チョコレートを選ぶ

「君の肌の色をした……」³⁶⁾

A. G. へ
谷間という言葉に出会う度に
君のことを思い出す

「谷間という言葉に出会う度に……」³⁷⁾

美少年達ではない そうではない
だが各々の中に
どこか愛すべき点を

³⁴⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.157.

³⁵⁾ Там же. С.302.

³⁶⁾ Там же. С.164.

³⁷⁾ Там же. С.165.

見つけることができる
サクランボ色の甘い唇
長い長い
足指が
サンダルから覗いている
首にかかった
明るい髪
白い縁のある
くすんだ薔薇色の爪

「美少年達ではない そうではない……」³⁸⁾

奇妙なことだ——
僕が
かけがえのない存在を見つけた後も
通りにいる美しい少年達が
一向に減らないのは

「奇妙なことだ……」³⁹⁾

それぞれの愛には、各々違った悦びと心の震えがあるというクズミンの世界観は、二人の少年との愛をパラレルに綴った詩にも端的に表れている。

リノールへ⁴⁰⁾

良い少年は毎朝すべての花に水をやり、高い棚の上にある植木鉢に届くように椅子に上る。椅子の下の床にスリッパを脱いで靴下で上る。悪い少年は毎朝新しいスポーツシャツを着るが、昨日のシャツはどこかベッドの下辺りの床に投げ出してある。良い少年は仕事へ行く前にどの食料がなくなったかを調べて、仕事帰りに店でそれを買う。悪い少年は週に1度の約束でなにやら特別なカッテージチーズを持ってきて、その後、長いあいだ冷蔵庫を引っかき回して食品の表示を調べ、賞味期限が過ぎたものをすべて蔑むように押しやる。良い少年は君の行きたい所へ一緒に出かけ、徐々にそれに興味を持つようとする。悪い少年は、なんだ、君はこんなことに人生の時間を浪費してるのかと言って嘲笑する。良い少年は君がパソコンに向かっている時、足下の床に座って、君の太腿に頭をのせる。悪い少年は、君が論文を書こうとしてパソコンに向かうと戸口に現れて、新しいメールが届いていないかどうかパソコンを見せてくれと言う。良い少年は、夜更けに君が彼の上に覆い被さっている時、君はなんてきれいなんだと喘ぐ。悪い少年は、愛の戯れのさなかに君の脇腹の贅肉を掴んで、これはなんだと言う。良い少年はある夜、君の膝の上に乗って、ねえ、僕は君がとても好きだ、だけ

³⁸⁾ Там же. С.162.

³⁹⁾ Там же. С.161.

⁴⁰⁾ リノール・ゴラーリクは1975年生まれの作家、詩人。クズミンは自作解説で、この詩はゴラーリクの影響を受けて書かれた作品であり、クズミンが書いた唯一の散文詩であると述べている。Там же. С.318.

ど……と言う。悪い少年は憔悴して一晩中歩き回り、人生で初めて魚とカリフラワーの吐き気を催すようなスープを作り、夜更けに全身をぴったり寄せて、君の代わりに泣きじゃくる。

「良い少年は毎朝すべての花に水をやり……」⁴¹⁾

手のつけられない悪童にしか思えない少年が、愛人のために慣れない手料理を作った上、2人の愛の罪悪感に苦しんでなのか、あるいは主人公のなんらかの不幸に同情しているのか、主人公の代わりに泣くという結末の意外性は、強烈な印象を残すと共に、愛の多様性を強調している。

なお、クズミンは同性愛の恋人達についての詩を書きながら、同性愛を主題とする現代詩人達の作品の出版や批評にも意欲的に取り組み、そのテーマに特化した文集『リスク』（全4号、1995-2002年）を刊行してきた。しかし、彼は、「自分の場合に限って言えば、テキスト自体において、同性愛のテーマはあまり重要ではなく、本質は別のところにある」⁴²⁾と語っている。もちろん、クズミンの恋愛詩はすべて同性愛を扱っているし、その中には、公衆の面前で愛撫しあう恋人達の姿を通じてゲイの解放を歌った作品もないわけではないが、その詩もゲイの人権を声高に主張するものではなく、むしろ生の喜びと自由に主眼が置かれている。彼の作品で、同性愛という愛の形そのものやゲイ特有の問題が語られることは意外にも少ない（先に引用した詩で「悪い少年」が泣く理由も、はっきりとは明かされていない）。

ゲイという主題や同性愛者としての心情は、恋人との関係を扱った詩ではなく、むしろ母親をめぐる詩に表れているように思える。クズミンの極私的な体験を描いた詩の中で、母というモチーフは恋愛と並んで重要な主題となっているが、母をめぐる詩には、生涯決して誰かの父親にも夫にもなることなく永遠に息子であり続けることに対しての、母への贖罪の願いを見て取ることができる。

家電を販売している
店のフロアで
店の制服を着た
凡庸な顔の5人の店員が
賑やかに話している

「そうか、君のところは息子なんだね？」
「息子さ」
「僕もそうだよ。セリョージャ、君のところは？」
「うちも、そうさ」
「ってことは、リョーハのところだけ娘なのか」

⁴¹⁾ Там же. С.182.

⁴²⁾ Там же. С.23.

僕は母の記念日に贈る
 野菜スライサーを選んでいる
 多分、母にはもう
 台所を動き回るのは大変だろう
 簡単な料理を少しだけ作るにしても。

どこか胸の右側が痛い。
 きっと僕の心臓は
 正常じゃないんだ。

「家電を販売している店のフロアで……」⁴³⁾

別の作品でも心のうずきが身体的な痛みを託して表現されているケースがあることを念頭に置くなら、この詩の場合も、「僕」が急に胸の痛みを感じるのは、おそらく身体的な理由ではなく精神的な理由に発していると考えられる⁴⁴⁾。

「凡庸な顔」をした彼らには明るい家庭があるが、我が身を振り返れば、老いた母は一人暮らしで（それは彼女が「簡単な料理を少しだけ」しか作らないことから推測できる）、母を慰めるのは独り身の自分だけである。母の体調を気遣い、記念日にお決まりの花などではなく野菜スライサーを贈ろうと思いつくほど繊細で孝行な息子は、自分が母親に家族や孫という「凡庸」な幸せを与えられないために、胸の痛みを感じずにはいられない。だからこそ彼は、「僕の心臓は正常じゃない」という表現によって、同性愛者である自分のことを苦々しく突き放すのである。

詩人の伝記的側面に即して言えば、7歳の時に両親が離婚し、母親に引き取られたクズミンは、15歳になるまで一度も父と再会することなく、母の強い愛と影響のもとに育った。クズミンは、自分が文学の道に進んだのは母方の親族の影響であり、もし父親に引き取られていたら自分は音楽家になったかもしれないと冗談めかして語っている。母エドワルダ・クズミナ（1937年生まれ）は出版社の編集者で、文芸誌『旗（ズナーミヤ）』や『新世界（ノーヴィ・ミール）』で書評や論文を発表していたし、母方の祖母は、サン＝テグジュペリやカミュの翻訳者として名高いノラ・ガーリ（1912-1991）だった⁴⁵⁾。ドミートリー

⁴³⁾ Там же. С.125.

⁴⁴⁾ 詩「愛し合う2人の文通を夢に見た……」（Там же. С.138.）では、ある夜、主人公が、80年代半ばの高校生が恋人に宛てた別れの手紙を夢に見る。若い思いを瑞々しく綴った手紙の内容と、それを夜行列車で読む自分の姿が対比された後、詩は次のように締めくくられる。

首と胸が痛む——それは一昨日交わした熱烈な口づけのせいなのか
 それとも風邪をひきかけているのか
 もう僕は決して17歳には戻れない

クズミンが心の震えを身体的な痛みを託して表現する場合、この詩のように肉体の痛みの理由を複数挙げて曖昧にしたり、「どこか胸の右側が痛い」という表現のように痛みの場所を不明確にすることによって、痛みが比喩であることを示唆するケースが多い。

⁴⁵⁾ 祖父ボリス・クズミン（1909-1943）は、ジョージ・エリオットについて学位論文を書いた英文学者だったが、若くして戦死している。

は母の一族を愛し、祖母の訳業等をテーマに学位論文「ロシアにおけるサン＝テグジュペリ」を書き、その志をついで自分もサン＝テグジュペリの『南方郵便機』の翻訳を手がけている⁴⁶⁾。

文学作品に囲まれながら母と2人で過ごした静かな幼年時代は、クズミンの詩に様々な形で痕跡を残している。たとえば、プラハ中心部にある高台の公園を舞台にした次の詩では、美しく活気のある周囲の様子とは一見不釣り合いな太った息子と母親の姿に、宗教画を思わせるような荘厳な光を当てている。(あるいは、これはクズミン自身の思い出なのだろうか。クズミンが15歳の時、母親は40代後半だったが、彼女はその頃にはとうに白髪になり、老けて見えたという)。

ペトシーン公園は
世界のあらゆる果てからやってきた
美しい朗らかな若者達で溢れている
その公園で太った眼鏡をかけた15歳くらいの少年が
引き締まった体つきの初老の母を突然抱きしめて
優しく口づける
片方の頬に
そしてもう一つの頬に
そして一番長い口づけを
首に

「ペトシーン公園は……」⁴⁷⁾

クズミンにとっての母という主題の重要性は、今では有名になった彼のブログで最初に公開された記事が、母をめぐる詩だったことから分かる⁴⁸⁾。幼年時代の母との幸福な思い出を愛しんだこの詩は、読者にも自分の子供時代を想起させるような素朴な温かさに満ちている。

小柄でとても年を取った
老女の話から始めたい
汚れたありふれたエプロンを着て
白い愛嬌のある頭巾を被って
テーブルの上の汚れた食器を
重たい2段のワゴンに載せていた

⁴⁶⁾ クズミンは、詩の中にもサン＝テグジュペリの作品のモチーフを登場させている。たとえば、詩「あるルーカスという19歳の男が……」(Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.133.)には、祖母が訳した『星の王子さま』のエピソードが挿入されている。なお、クズミンの詩にはサン＝テグジュペリの他にも様々な作家へのオマージュが見られ、彼のテクストは多彩な声が響き合うポリフォニックな空間となっている。

⁴⁷⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.129.

⁴⁸⁾ クズミンは2002年6月21日に、ライブジャーナルのサイトに自分のブログを創設した。自身の詩や評論に加えて、多数の現代詩人の詩や文壇のニュースを掲載している。

プーシキン通りの喫茶店「ショコラードニツァ」⁴⁹⁾で。
そこはソ連的で狭かったが
壁には店の名にちなんだ複製画が掛かっていた⁵⁰⁾
そして母は
僕が学期の終わりにオール5の成績を取ると
いつもそこへ連れて行ってくれた
そしてワゴンが僕達の脇を通ると
母は僕が空にした皿を自分でワゴンに片付けた
その店のお勧めの甘いクレープが入っていたその皿は
ほとんど汚れていなかった
というのも僕はクレープにチョコレートソースをどうしてもかけられなかった
なんだかそれがだらしがない気がして。
だからフォークに乗せたクレープをソース入れに浸すだけにしていた
そして老女は突然顔を輝かせて僕の母にこう言った
ところでその頃母はもうすっかり白髪だった
早く白髪になったんだ、僕の母は
もし遺伝するなら僕も5年くらいするとそうなる
「えらいわ、とてもいい子ね！」
意外なほどよく響くよく通る声で
「小柄でとても年を取った……」抜粋⁵¹⁾

母が老女に心配りし、相手からも温かくねぎらわれる様子を、誇らしく見つめる敏感な子供の表情が目につかぶようだ。

なお、詩の後半では、その喫茶店があった場所に今では流行最先端のカフェがオープンして、若い詩人や編集者が愉快地集っている光景が語られるが、詩の主人公は現代の文壇の活発な状況を楽しみながらも、詩の最後で、皆が親しく「なにか高価で美味しくないものを誠実に食べていた」昔を、ほのかに懐かしんでいる。この詩では、幼い頃に母と大切な時間を過ごした場所が現代の風俗と対比されているが、他の詩においても、母がやはり古き良き時代の象徴として登場し、現代のロシアに対置されていることは注目に値する。

プーリチの思い出⁵²⁾

恐れるな
これはおまえの故国だ

僕の祖国。

⁴⁹⁾ 「ショコラードニツァ」は、「ホットチョコレートを運ぶ少女」の意。

⁵⁰⁾ ロシアには「ショコラードニツァ」という店名の喫茶店は複数あり、しばしば、スイスの画家リオタード (Jean-Étienne Liotard, 1702-1789) のパステル画「ホットチョコレートを運ぶ美しい少女」の複製画が掛かっていた。

⁵¹⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.59.

⁵²⁾ ウラジーミル・プーリチ (1932-1994) は、ロシアの自由詩の理論家。

そこでは次のものが残っただけだ。
ガランティーヌ⁵³⁾をのせたオープンサンド——
それは多分、
とてつもない深みに棲息している風変わりな海の生き物だ——
証券取引所の2階にある
居心地の良いカフェのメニューにのっていたんだ。
そのカフェで僕は40分を
バレエ批評家のゲルシェンゾーンと対話して過ごした。
誰もが自宅の台所で友人達とお茶を飲んでいた頃に話していた言葉は
今では永遠に失われてしまったので
その代わりとなる言葉を苦勞して探しながら……

そう、そして
母
久しぶりに会うといつも
僕がセーターの襟に差した万年筆を
端の方へ、肩の方へずらせと言う。
何かの拍子に
喉に刺さらないようにと……

これらのものを
どうやって一緒に包み込むというのか。
それにグローズヌイの燃える石油や
ソロチ川の蛇行する岸辺に
景観上の理由だけで
建てられた
小さな風車を？
空間と空間の繋がりは崩れ去った。
かき集められた断片から
ある者達は去り
ある者達は歩き去り
ある者達は沈黙している

「ブーリチの思い出」⁵⁴⁾

ソ連崩壊5年後の混沌の時代に書かれたこの詩で、主人公は、祖国が残したものとして、洒落たオープンサンド、息子思いの母、南部の石油火災、ロシア北西部の川辺の風車を挙げて、今やロシアが相容れない様々な部分の寄せ集めでしかないことを強調している。そ

⁵³⁾ 主に冷肉料理を指す。

⁵⁴⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.207-208.

して、政情不安なチェチェンでの事故と、詩人プーシキンにまつわる景勝地ソロチが対比されているのと同様に、母という主題は、「誰もが自宅の台所で友人達とお茶を飲んでいた頃に話していた言葉」を失った新時代のカフェと対置されている。クズミンの詩における母なるものは、矛盾に満ちていて時に軽薄な新生ロシアの社会や風俗の対極にある、不変の価値を体現しているのかもしれない⁵⁵⁾。

4. 永遠の方へ——創作と社会的活動

ところで、本稿の最初で触れたように、クズミンは今まで20年以上に渡って、編集者、文学活動家として活躍し、多くの詩人達の作品を書籍やサイトで紹介してきた。そうした活動を行ってきた彼の動機や思いを、彼の詩の中に見いだすことはできるだろうか。

たとえば、クズミンが90年代後半に、時代に先駆けてインターネットを駆使して文学活動を行うようになった理由の一端を、彼の詩から考察することもできるかもしれない。クズミンは、インターネット上でロシア現代詩の膨大なアーカイブを公開したり、様々なサイトを通じて地方の現代詩人の作品を収集してアンソロジー『非首都の文学——ロシアの地方の詩と散文』(2001)⁵⁶⁾等にまとめたりしてきたが、その背景にはもちろん、モスクワで詩集や雑誌を出版しても地方都市では入手しがたいという書籍の流通の問題や、(ロシアの特徴である)都市と地方の文化的連携の希薄さという社会的な状況があった。

しかし、クズミンのいくつかの詩を読むと、彼がインターネットに惹き付けられたのは、そうした技術的な利点のためだけでなく、ウェブ空間に寄せる一種のロマンチズムのためでもあったことが分かる。

⁵⁵⁾ ただ、補足して述べておきたいのは、クズミンの詩では母親という価値の普遍性に特別な地位が与えられているものの、それと対置される様々な断片が決して否定されているのではないということである。1996年という混乱の時代に書かれたこの詩は、ロシアが同じく社会的変動を体験した革命前夜の1908年に象徴主義詩人アンドレイ・ベールイ(1880-1934)が綴った一編の詩を想起させる。その詩の中でベールイは、日露戦争に疲弊し不穏な政情に翻弄されていたロシアの民に「砕け散れ」と書き、クズミンの詩と同様に、空間と空間の繋がりが崩れ去った故国の不調和を表現した。

沢山だ——待つな、希望を持つな
 散り散りになれ、我が不幸な民族よ！
 空間の中で斃れ砕け散れ
 苦悩の年月を重ねよ！
 「絶望」抜粋

だが、ベールイのこの詩や、この作品を冒頭に掲げたベールイの詩集『灰』(1909)全体が絶望的な暗さに貫かれているのに対して、クズミンは砕け散った祖国での生を受容している。クズミンが社会や日常の個々の断片を拒絶するのではなく強い関心と共に体験していることは、他者達をめぐる彼の作品に表れているし、処女詩集の名付けの源泉となった後述の詩「アンドレイ・セルゲーエフの思い出」からも明らかである。その詩で書かれているように、日々の断片は、たとえうんざりするような出来事や取るに足らない愉しみであっても、クズミンにとっては、自分が生きていることを実感させる体験の連続にはかならない。

⁵⁶⁾ 同書は、現代ロシアの地方文化に目を向けた取り組みとして注目され、第15回モスクワ国際書籍展示会で「今年の書籍賞」を受賞した。その序章でクズミンは、現代詩の収集におけるインターネットの利点を強調している。

夜半過ぎまでモニターのスキムミルクを覗き込んでいる
（まだ接続の悪い時間帯だが、やがて割引の時間帯が来るのを待ちながら⁵⁷⁾）
おまえは眠りにつきながら、部屋の暗がりから、脇から言う——
「君は星占い師みたいだね」
（白い模様の入った青いシャツ）
「言って——星空に向かって——
（浅い眠気を追い払わないように囁き声で、
1週間働いて疲れ切って）
お眠り、愛しい人」僕は止めなくてはならない
この夜中の仕事を、ウェブの夜の彷徨を
おまえが朝出かける前に私に口づける時
私は目を覚まさなくなってしまったのだから
「夜半過ぎまでモニターのスキムミルクを覗き込んでいる……」（1998）⁵⁸⁾

この詩ではインターネットの世界が、夜、星、放浪というロマン主義的なモチーフと結びつき、ネットサーフィンが夜空の旅になぞらえられている。こうした夜間飛行のイメージは、クズミンが祖母の影響で愛読し、自らも翻訳に取り組んだサン＝テグジュペリの世界を喚起する。クズミンも、どこかにひっそりと埋もれている未知の詩を求め、インターネットという無限の広がりの旅しながら、飛行士のような感覚を味わったのだろうか。彼は、様々な詩人達の作品を記録し出版する記憶者である前に、詩を求めて飛び立つ冒険者でもあるのだ⁵⁹⁾。

さて、より広い視点で、クズミンの文学活動家としての意識が彼の詩にどのように反映されているかを考えるには、クズミンが詩人達に寄せた一連の詩に向き合う必要がある。クズミンは、ブラート・オクジャワ（1924-1997）、ゲンリフ・サプギール（1928-1999）など、敬愛する詩人達に寄せた詩を書いていて、それらの作品からは詩人や詩の世界に対するクズミンの愛を推し量ることができる。

中でも、『モスコーフスキー・コムソモーレツ』紙のコラムニストとして知られていた詩人アレクサンドル・アローノフ（1934-2001）に捧げた次の詩の末尾では、詩人の死後に作品が不当に忘れられていくことへの危惧が記されている。そこには、自分の手で記憶の風化を食い止めたいというクズミンの出版家としての自負心、使命感を見て取ることもできるだろう。

2 度目の発作の後

⁵⁷⁾ 90年代後半のロシアでは深夜になるとインターネットの接続が早くなり、料金も安くなったので、詩の主人公はその時間帯が来るのを待っている。

⁵⁸⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.155.

⁵⁹⁾ なお、クズミンがロシア語に訳したガブリエル・グランシーの詩には、遠く離れた恋人にパソコンでメールを送る様子が、やはり星や夜空というモチーフと共に描き出されている。また、その訳注でクズミンは、インターネットが普及することで愛の形がどう変わり、それが現代詩でどのように表象されているかという問題に関心があると書いている。Там же. С.315.

彼の論文からは輝きが失せていった
今では彼の原稿は
前より小さな活字で印刷され
ページの下部には
広告のスペースがある。
電話で話していると
彼は別れを告げるのを忘れて
ただ
沈黙が訪れて
受話器を置く……
詩は
もう書いていない。
といっても
それはずっと前からだ——
彼自身が言っていた
自分をホダセーヴィチ⁶⁰⁾に喩えて
雑誌の雑文で忙しいと。
半世紀後には
彼はもちろん忘れられていくだろう
不当にも。

「2度目の発作の後……」(1994)⁶¹⁾

クズミンは、この他にも、身近な詩人達の生を記録し、その死を悼む一連の詩を書いている。次の詩は、朗読会の帰りに環状道路を横断しようとして交通事故で亡くなった詩人アンドレイ・セルゲーエフ(1933-1998)に捧げた作品である。

アンドレイ・セルゲーエフの思い出

生きているのは素晴らしい
警官に腹を立てること——身分証明書をチェックするために
いたずらに呼び止められた。
乗車券とコンドームをうっかり落とすこと

生きているのは素晴らしい
マクドナルドに立ち寄って
スグリのパイを買う
チェリーパイは待たなくてはいけなかったから

⁶⁰⁾ ウラジスラフ・ホダセーヴィチ(1886-1939)はロシアの詩人、批評家。1920年代後半以降はほとんど詩を書かず、回想記や文学評論の執筆に専念した。

⁶¹⁾ Кузьмин Д. Хорошо быть живым. С.214.

生きているのは素晴らしい
青みがかったショーウィンドーに映る
自分の姿が気に入らないこと

どうか助けてくれ
地下鉄駅に続く道路の交差点を横断するのを。
地平線上の
信号の邪悪な深紅の太陽を止めてくれ。
車の流れに
道を空けるように命じてくれ。

「アンドレイ・セルゲーエフの思い出」⁶²⁾

この詩では、亡くなった詩人についての切実な祈りと、日常の些事から成る生の賞賛とが対比的に綴られている。詩人の運命への思いと生の賛美の両方を記したことによって、この作品は、クズミンという人物の世界観を統合的に表現し得ていると言える（だからこそ彼は処女詩集のタイトルを、この詩の1節に求めたのだろう）。この詩において2つの思想が並置されているように、クズミンにとって、この世界で偶然出会った他者や自分の生の瞬間、日常の様々な断片を記録しようとする詩人としての根本姿勢と、詩人や詩の運命に共感しながら他者達のテキストという世界を旅して記録するという編集者としての姿勢は、明らかに響き合っている。それはどちらも、くりかえされることのない個人の生を切り取り、それに愛情を傾け、記憶するという行為である。

クズミンは、13階の自室から飛び立とうとした大胆な翼で、他者達との一体化を求めて街をさまよい、他者達の手記の空を飛ぶ。愛の可能性は多様で無限であると信じて――。

⁶²⁾ Там же. С.211.